第二次の造字法“会意”

そこで、それを明確に表現するために、二つ以上の“象形字”もしくは“指事字”を組み合わせることを考え出しました。つまり、酒の器の形（酉）に水（氵＝氵）を組み合わせて“酒”という字を作る、という方法です。

二つ以上の文字の意を組み会わせる、ということで、この造字法は“会意”と名付けられました。木を二つ並べた“林”や、木を三つ組み合わせた“森”も会意字です。

“並”は“奴”で、立（人が立っている象形で指事字。立つという事を表わした字なので、象形ではあるが象形字ではありません）という指事字を二つ並べて、“ならぶ”という意味を表わしました。

“比”も、人が二人並んでいる形を表わした字です。“ならぶ”（比翼）意味にも使いますが、二人並べばすぐに始まる“くらべる”（比較）　意味に使われる会意字です。

“男”は、田に出かけて力を出して働く人という意味で“おとこ”を表わしました。

“動”は、重い物でも力を加えると“うごく”ということで表わした会意字です。鳥と口で、鳥が鳴くことを表わし、犬と口で、犬が吠えることを表わしています。

人は休む時、日蔭を利用します。だから、人が木に寄りそう形にして“やすむ”意味を表わしました。

“東”という字は“木”と“日”とで作られています。木の間に日があるのは、日が出たばかりであることを意味しています。そこで、日の出る方角“ひがし”を表わしたものです。

山を上って行ってやがて下る、その境になる所を“とうげ”と言います。その“とうげ”を“峠”という字で見事に表わしていますが、これは、日本人が作った“会意字”です。

“裃（かみしも）”、“榊（さかき）”、“辻（つじ）”、“辻（すべる）”など、日本で作られたものには、この会意字が多いようです。